

主の昇天

2015.5.17

マルコ 16・15-20

クラレチアン宣教会司祭 長崎 壮

皆さんおはようございます。先月 26 日、大阪カテドラルで無事に司祭叙階のめぐみをうけることが出来ました。先ず、皆さんのお祈りに感謝いたします。

司祭叙階の一週間前、わたしが高円寺教会の最後の助祭奉仕のミサ後のご挨拶で、助祭としての最初の御ミサと最後の御ミサが偶然にも幸田司教様の司式であったこととお話しました。幸田司教様の助祭叙階式のお説教は、「今後、司祭になっても人々に仕える生活の始まりである助祭になった日の心を忘れずに…」という内容のもので、“奉仕職の貴重な心構え”として助祭としての一年間何度も読み返してきましたので、この偶然に何か神様の御摂理を感じないではいられませんでした。

そして今日、高円寺教会での司祭として皆さんと捧げる初ミサが「主の昇天」の祝日に当たっているということにも神様の御摂理のようなものを感じています。

今日はこのことの “わけ” についてお話しさせていただきたいと思います。

毎年「主の昇天」の祝日に朗読される福音の中心的メッセージは、「復活の主が目に見え、体に触れるという形では弟子たちから離れて天に昇ってしまったが、弟子たち、わたしたちといつまでも共にいる」ということです。そして主イエスが天に昇られるときに弟子たちに残したこの “みことば” 「主があなた方といつまでも共にいる」というメッセージは高円寺教会で助祭奉仕をした一年間、わたしがミサの中で一番伝えたかったメッセージでした。

この「主が共にいる」というメッセージについてですが、旧約聖書の中では神様から大きな使命を任せられて、困っている預言者を神様はたびたび「わたしはあなたと共にいるのだから安心しなさい」と励ます場面が多くみられます。新約聖書の中でもマリア様も天使ガブリエルから救い主を生むという使命を与えられて戸惑っているときに「主はあなたと共にいます」ルカ(1:28)と励まされました。

わたし自身、去年の三月に助祭叙階されてから、祈りの中で何も語りかけてくれないときでも、イエス様は沈黙の内にも私と共にいてくださるということだけは感じられました。このことへの信頼が、これまでわたしを支えてくれた

と思っています。

昨年一年間、わたしがお話した説教は皆さんを退屈にさせるようなものだったと思いますが、それだからこそ、わたしがミサの中で一番皆さんに伝えたかったことが、福音朗読の前の「主は皆さんとともに！」という今日の福音の“みことば”でした。わたし自身も自分の説教の内容がまだまだ未熟であることを自覚していましたが、そんなわたしを神様が見かねて「主は皆さんとともに」というわたしたちを勇気づける“みことば”を心を込めて伝えるよう促されたのではないかと思います。説教となると自分の言葉で話さなければならないので、「ああでもない。こうでもない」と悩んでしまうのですが、ミサの福音朗読の前にこの言葉を語るとき、わたしが語るのではなくわたしと共にいる神様が語りかけるような不思議な感覚がありました。

このようにわたしが皆さんに一番伝えたかった「主が共にいる」ということがテーマとなる「主の昇天」のミサを初ミサとして捧げることができることが神様の御摂理として感じられた“わけ”です。

さて、話は変わりますが、ここで叙階式のときにお配りしました記念カードに込めたわたしのメッセージについて少し説明させていただきたいと思います。

この絵はクラレチアン会の司祭であり特に中南米では有名な宗教画家であるセレッソ・バレド神父の作品です。クラレチアン会の創立者である聖アントニオ・マリア・クラレットが宣教の武器である十字架と福音書を手に町や村を福音を宣べ伝えながら歩く姿が描かれます。クラレットはキリストと堅く結ばれていますから、キリストと共にある聖霊に促されて宣教する姿がおわかりになると思います。そしてクラレットが通った所にはキリストの光がもたらされ、明るくなっています。

わたしが派遣された大阪の枚方教会では、毎週木曜日に病気や高齢で教会に来ることが出来ない人を信者さんとともに訪ねて御聖体を運んだり、共に祈ったりという仕事もします。このことを通じて聖クラレットと同じようにキリストの光を人々にもたらすことができたらの願いを込めました。

御絵の裏面には、「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである」（マルコ 1:38）という“みことば”を選びました。

今まで大切に育ててくれた高円寺教会や居心地の良くなった場所への執着を断ち切って真に自由な宣教者として生きるというわたしの使命を自覚させる“みことば”です。

イエス様の“みことば”を信じ、それを具体的に生きるならば豊かな実を結

ぶというイエス様の言葉を信じています。二週間前の復活節第五主日の福音朗読は、今日の福音はぶどうの木と枝のたとえを用いて木であるキリストに枝であるわたしたちがつながって実を結ぶことの大切さが説かれましたが。ぶどうの木であるイエス様と結びつくことは、安全な場に不動のまま留まるということではありません。わたしたちをイエス様と同じような生き方へと駆り立てていくのです。今日の“みことば”の「共にいる」の意味も「使命を告げるために共にいる」の意味であり、具体的には、宣教の使命を弟子達に与えることです。

最後になりますが、高円寺教会では皆さんを通して神の愛を感じることが出来ました。今から振り返ってみると、過保護に育てられ過ぎた神学生、助祭時代だったと思います。

しかし、逆に考えると、皆さんを通じて神様の愛という栄養を十分すぎるほどいただき司祭になった今後は一層心を込めて信者方に奉仕できるような気がします。

お世話になった高円寺教会の皆さんとは遠く離れた大阪に派遣されましたが、聖霊によって皆さんと結ばれ、心は皆さんとともにありたいと願っています。主がいつも高円寺教会の皆さんとともにあることを祈ります。皆さんにもわたしと共に主がいつもいてくださり、力づけてくださるようにお祈りを願います。